

目 次

|                |            |
|----------------|------------|
| 一人一人が大事 .....  | 葛井 義憲 (2)  |
| クリスマスの喜び ..... | 篠田 潔 (5)   |
| 自分発見のために ..... | 出口 博也 (11) |
| 新入生の皆さんへ ..... | (14)       |



チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」のお話をブックレットにまとめ、発行しています。無料でどなたにでも差し上げますので、ご希望の方は、キリスト教センターへどうぞ。チャペルにも置いてあります。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洸善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纓)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(柏木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)
- No.12. 「絵本のちから」(松居 直)
- No.13. 「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？」  
ーこどもの物語と聖書に見られる<しょうがい者>差別ー  
(荒井 英子)
- No.14. 「お父さん、僕はなにに人？ ー間 (はざま) から読む聖書ー」  
(金 永秀)
- No.15. 「人権・生命の尊厳ー野宿生活者の現場からー」(松本 普)

# 一人一人が大事

葛 井 義 憲

昼の12時になると、全地は暗くなり、それが3時まで続いた。3時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」という意味である。

(マルコによる福音書15章33～34節)

本日は大学創立記念日礼拝です。名古屋学院大学は創立され47年がたちました。現在では二つのキャンパスで多くの学生たちが日々学びそして成長しています。これまでの大学の歩みを振り返ってみますと、多くの人々の祈りがありまた大学の構成員たちが連帯してひたすら働いたからこそ、今のすばらしい大学が存続しているのでないかと思うのです。大学はこれからも神さまに創設されたキリスト教主義大学とし歩みを続けなければなりません。

さて大学がキリスト教主義大学として存続発展し続けるためにはいくつかの条件がなければならないと思います。まず一つ目は「神様の豊かな恵みと導き」これが必要です。第二番目は「組織を指導される方の洞察力と多くの人々の心を受け止める愛」そうしたものが非常に必要です。そして、三つ目は組織に生きる人たちが、「喜びを持って生きることができるか」ということであります。そ

うした要件が必要であるように思います。わが大学もそのような条件を備えながら現在続いているのであります。

話は変わりますが明治の始め、キリスト教主義学校の一つとして、京都に同志社という学校が創られました。新島襄という牧師が御所の近くに当時の言い方ですと「耶蘇の学校」を創ったわけでありました。彼は、同志社を創設してから名前をさん付けで呼んだ人が二人いました。一人は、妻新島八重です。彼は、いつも妻を見ると「八重さん八重子さん」とそのように呼びました。再来年NHKの大河ドラマで新島八重が放映される予定になっています。

もう一人、彼が名前にさんを付けた人がいました。当時同志社で用務員として働いていた五平さんという人です。新島は校内で五平さんに会うと、「五平さんこんにちは！」と言いました。そうすると、背の低い五平さんは、嬉しそうに笑いを浮かべて、手

ぬぐいをとって、「先生、こんにちは」と、頭を下げた。そういう逸話が残っています。学生たちは、この五平さんのことを「五平！ 五平！」と非常に偉そうに呼んでおりましたけど、新島襄は、「五平さんこんにちは」といつもさん付けで呼んでおりました。五平は、非常に新島のこと好きでした。遺言に「もし、自分が亡くなったら新島襄先生の隣に自分の墓を作ってください」と書かれてあったそうです。そして実際今も京都の若王子の新島襄のお墓の隣に五平さんのお墓があります。五平は「新島先生が信じているイエス・キリストを自分も信じたい」と願いました。新島は、あまり陽の当たらない、そういうところに目を向け、そこに生きている人たちを大切にしました。そのような生き方は救い主イエス・キリストと同じなのであります。

本日の聖書の箇所には、キリストの十字架上での言葉が記されています。悲しいまでの言葉です。「わが神、わが神、何故私をお見捨てになるのですか」。腹の底から絞り出すようにして吐き出される言葉が、書き出されています。この言葉を聞いていたのは、女性たちでした。マルコによる福音書15章の40節～41節には何人かの女性の名前が書かれています。マグダラのマリア、小ヤコブとヨセの母マリア、サロメたちです。彼女たちはガリラヤ出身の女性たちです。女性たちは当時一人前の人とはみなされていませんでした。ある重要な

ことを決議し、審議する場には女性はいませんでした。たとえば学問を修めたいという志があってもその場から除外されました。半人前の存在として扱われていたのです。しかしイエスは、その女性たちを愛すべき存在、神によって命を与えられた尊い存在として接触しました。そのイエスの行動と言葉は、彼女たちに影響を与えました。イエスは、ガリラヤというところから、エルサレムまで宣教して愛の業を行う為に歩きましたがその宣教対象には、女性たちもたくさん交じっていました。当時としては奇妙な光景でありました。彼女たちはキリストと一緒に歩きたかったのです。イエスのそばで生きたかったのです。十字架上で、イエスが十字架にかけられて死のうとするその最後の瞬間まで見届けたかったのです。男の弟子たちは、このイエスが捕まったという事実を知りますと恐ろしくなって、逃げ出してしまったのです。もしかしたら、イエスと同じように処刑されるかもしれない。捕まって鞭打ちの刑にあうかもしれない。そういう思いでもう、蜘蛛の子を散らすように逃げ出しましたけど、彼女たちは、目にいっぱい涙を溜めながらもイエスを見つめておりました。そして「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ、なぜ私をお見捨てになったのですか」というイエスの言葉をじっと聞いたのです。

陽のあまり当たらないところに、イエスは目を向けました。イエス自

身も馬小屋で生まれ、最後は「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ、なぜ私をお見捨てになったのですか」と神に祈らなければならないような言わば陽のあたらない場所に生きたのでした。そしてイエスの死と復活後も初期の段階では、そこにイエスをキリストと慕う人はやはり陽の当たらない世界に生きた人たちでした。たとえばコリントというところに教会ができますけど、そのコリントの信徒への手紙一の1章26節によりますと、どんな人が復活のイエスのもとに集まったかと言うと、弟子パウロはこう書いています。「人間的に見て知恵ある者が多かったわけではなく、能力のある者や、家柄のよい者が多かったわけでもありません」。やはり社会で弱くて、貧しい者たちが、イエスをキリストと信じ復活のキリストと共に生きようとしたのです。

その後紀元60年代にはローマ皇帝ネロによって、キリスト教の弾圧が強くなってきますけど、小さき民たちがまさに弾圧をくぐり抜けて小アジアにギリシャに、ローマにヒスパニアへとキリスト教を宣べ伝えたのでありました。キリストが共にある。

(ふじいよしのり 宗教部長・人間健康学部長 2011.10.18 大学創立記念日礼拝)

復活のキリストは共にある、貧しく、小さい私たちをいつも見つめていてくださる。これが、陽のあたらない場所で生きた彼らまた彼女たちを動かしたのであります。

新島の遺言にこんながあります。

「生徒を丁重に扱って欲しい」

これは、最後の言葉でありました。彼は、なにも生徒を甘やかせと言ってはおりません。生徒たちの可能性を伸ばし、生徒たちが成長できるよう教職員は力いっぱいこころがけて欲しい。そして、どの存在をも粗末に扱わないで欲しい。彼らは神様に愛される、大切にとても豊かな存在なのだからと、新島は後世に伝えたかったのではないのでしょうか。

名古屋学院大学は、歴史を重ねるにつれますますキリストの香りを漂わせております。みんなが祈りつつ、連帯し、厳しい環境の中にあってもそれを乗り越えて、神を信頼し、一人一人が大事にされる学校として益々発展するよう祈ってやみません。今日は多くの方と共に、創立記念日礼拝を迎えられましたことを、心より感謝いたします。

## クリスマスの喜び

篠田 潔

その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。

すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼う葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」

すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」

天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼う葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。聞いた者は皆、羊飼いたちの話を不思議に思った。しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

(新約聖書 ルカによる福音書2章8～20節)

クリスマスの喜びという題をつけましたが、クリスマスを最初に喜ぶのは子どもたちでしょうね。12月になると、早々と、サンタクロースが登場します。

保育園や幼稚園にはサンタクロースがやって来て、プレゼントをくれます。それが嬉しいのですね。プレゼントを持って来るから、喜べるのでしょう。



次に喜ぶのはケーキ屋さんだと思います。クリスマスケーキが沢山売れるからです。あの利益は、ケーキ屋さんにとっては、クリスマスプレゼントでしようし、クリスマスセールを行うデパートや、クリスマスディナーショーを催すホテルなどもそうでしょう。

一方、クリスマスということで、さまざまにお金を出す側も、それを喜びとしてのことであれば、その喜びも、クリスマスならではのものと言えましょう。

クリスマスの諸行事が、キリストの誕生祝いとしてなされていることは、よく知られていることと思いますが、聖書によれば、クリスマスの喜びは、神がそのひとり子を、救い主として、この地上の、私たちすべての人間のために、この世に、人として誕生させられたことにあります。その名は「イエス」となづけられました。このイエスが救い主(ギリシャ語でキリストといいます)であるというので、イエス・キリスト(英語ではジーザス・クライスト)と呼ばれるわけです。

以上のことから言って、クリスマスの喜びは、神が、わたしたちに、キリスト(救いぬし)を、神からのプレゼントとして与えて下さったことにあります。このプレゼントが正しく受け取られるようにと願って止みません。

クリスマスに世界中に登場するサンタクロースは、小アジアにいた

ニコラウスという名の司祭が、クリスマスイヴに、貧しい子どもたちの家々を回ってプレゼントを配って歩いたことが発端となっています。こういう働きをしたことが讃えられて、この人は「サンタクロース『聖(サンタ)ニコラウス』』と呼ばれるようになりました。「サンパウロ」とか「サンフランシスコ」とか「サンタマリア」など「聖」が冠されている人物やそれに因んだ地名はいくつかありますが、「サンタ」という名の人がいるわけではないのに、それが固有人物名のようになっているのは、この人が行なったことがそれほど讃えられているからでしょう。

思いがけないプレゼントを喜んだのが、貧しい子どもたちであったことはいうまでもありませんが、その喜びは同時にプレゼントを贈ったニコラウスの喜びでもあったでしょう。今でも、サンタクロースからプレゼントを貰って喜ぶ園児たちの姿を見れば、保育園や幼稚園の先生方もそれを自分の喜びとするでしょうし、それはまた園児の親が喜ぶことでもありましょう。

ただし、サンタクロースがプレゼントを用意するためには、そのためのお金も、出かける時間も労力も要ります。それを惜しげもなく出して、子どもが喜ぶのを見て自分も喜ぶのが、サンタクロースです。

子どもが大きくなると「サンタクロースってほんとうにいるの？」など、問うことがあります。そういう

時、大人はたじろいではいけません。それは、サンタクロースについては「いるか、いないか」を議論しても始まらないからです。要は、自分がサンタクロースになるかならないかにあります。

ニコラウスは、自分の財布をはたいて、子どもたちのためにプレゼントを用意し、それが誰からの贈り物であるかは知らなくても、貰ったことを喜ぶ子どもたちの喜びを自分の喜びとした人でした。ニコラウスは既に世を去っていますが、その命(または精神)は、それを受け継ぐ人によって、今も生きるのです。「わたし」や「あなた」がこのニコラウスの命を引き継がない限り、サンタクロースなんてどこにもいません。「わたし」や「あなた」がそれを引き継ぐなら、サンタクロースがいることは確かです。皆さんも是非「サンタクロースはいるよ」と確信をもって言う人であって欲しいものです。

ところで、自分に喜びがない人は、他人に喜びを分かち合うことはできません。ニコラウスが子どもたちを喜ばせたのは、自分の心が喜びに満たされていたからです。その喜びとは、神様からのプレゼントをいただいたことによるものですが、その事情は、聖書のクリスマス物語の中に記されています。

それによりますと、夜、野原で羊の群れを守っていた羊飼いたちに、天からの光を受けて現れた天使が、「恐れることはない。今日、ダビデの

町に、あなたがたのために救い主(ぬし)がお生まれになった。その幼な子は、布にくるまって飼ひ葉おけに寝かせてられている。それが『しるし』である。」と告げました。そして、その宣告が終わると同時に、天には、天使と共に天の大軍勢が現れて、「天には神に栄光、地には人に平和」という大合唱の歌声が響きわたった、ということです。クリスマス喜びは、まず天の側、つまり神の側で歌われた、ということです。いま、クリスマスイヴには、人間の手による照明が輝き、地上での歌声が響いていますが、最初のクリスマスイヴは、地上は暗く静まり返っていたのに比べ、天からの光が輝き、天における歌声が響いていたのでした。

この光と歌声がクリスマスの喜びを伝えるものであります。

「神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が1人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネによる福音書3:16)というのがクリスマスという出来事の意義であります。この神の独り子が人間として誕生するにはさまざまな困難がありました。まずは、その独り子は、婚約はしていてもまだ結婚関係には至っていないマリアのお腹の中に宿ったのですから、マリアはびっくりです。婚約者ヨセフだって同じです。が、マリアは「神には出来ないことは何ひとつない」と天使によって告げられたので「お言葉通りにこの身になりますよ

うに」と受け入れた結果のことでした。

その頃、「本籍地で人口の調査をせよ」との勅命が下ったので、身重の身を抱えて、二人がベツレヘムの町へ入ったところ、宿屋はどれも先客で満員、やっとのことで得た宿り場は、家畜小屋でした。そこで生まれた幼子は、布にくるめて、飼い葉おけのなかに寝かされました。最低の誕生の仕方でした。

天使のお告げを受けた羊飼いたちは「では見に行こう」と言って出かけて行き、その幼子を見て喜び、神を賛美した、といいます。それというのも、そのような状況の中で寝かされている幼な子の姿が、神がすべての人を救うためにこの世に誕生させられた救いぬしの「しるし」であることを天使によって知らされていたからであり、それを信じたからであります。

年末には「これはほんのおしるしですが」と言って御歳暮が届けられます。「おしるし」というのは贈り主が贈る相手にたいして抱いている好意や感謝をあらわすしるしです。だから、贈られた物自体を受け取るだけでなく、そこに贈り主の思いがこめられている「しるし」として受け取ることが大切でしょう。「しるし」は英語で言う「サイン」です。野球の監督は、選手にサインを送ります。観客には何のことか分からなくても、選手には監督の身振り手振りが、どういうサインであるかを知らされてい

ますし、監督を信頼しているからそれを読み取ってプレイします。羊飼いたちが、飼い葉おけの藁の上に寝かされている幼な子を見て喜び神を賛美しながら帰っていったのは、それが、神から送られた救い主の誕生のサインであることを知らされていたからです。

わたくしは、愛知国際病院のホスピスへ週1回出かけて、患者さんの話し相手になっていますが、ある時、1人の婦人が「懺悔させてください」と言われました。ホスピスのベッドに横たわっていて自分の人生を顧みた時、「懺悔せずにこのままでは死ねない」と思われたからでしょう。それは、言い換えれば「赦されていますよ」という声を聞いて安心できなければ、死んでも死に切れない、ということでもあったのでしょう。

この人に伝えることが出来たのは、「キリストは『こんな自分のようなみすばらしい心の持ち主であるままでは、死ぬにも死ねない』としか言えないような貧しい心の持ち主のところへ来られたのです。汚れた飼い葉おけの中を宿る場所とされたのは、そのしるしなのです。キリストが立派な御殿の中におられる方なら、招かれても、ためらうしかありませんが、家畜の匂いが漂っているような飼い葉おけから声をかけていくださっているのですから、大丈夫、キリストには赦されています。聖書が伝えていることはそういうことですよ。」ということでした。それを聞いて

て、その人は安心して召されたようです。

また、ある人は「死んだらどうなりますか」と問われました。死後のことが心配なのですね。わたくしは「そういうことは分かりません。だって、死後どうなっているか報告を聞いたことがありませんし、聞けるものでもありませんから。」と言って、この問いには誰も答えられない理由を説明して、納得してもらいました。しかし、それで安心できるというものではありませんから、「キリストは、十字架につけられて死んで葬られ、すべての死者と同様に、死者の落ち込むどん底まで落ち込まれたのであったが、三日目に死者の中から復活して、今も生きておられる方であること」が、聖書が伝えている使信であることを伝え、このキリストの十字架と復活とが、神から与えられている死生についての「しるし」であって、この「しるし」を「しるし」として受け止めて欲しいし、飼い葉おけに宿られたキリストに見られるしるしは、以上のことも含めてのこととして、各自なりの死生観特に死後観を捉えていただきたいと願いました。

親に愛された体験を持っていない人は、「子どもを愛しなさい」と言われてもどうすることが愛することであるかを知っていませんから、愛しようがないのです。同様に、喜びを味わい知っている人は、ほかの人にも喜びを伝え、また分かち合うことができます。

羊飼いたちは、飼い葉おけに寝かされていた幼な子に、神からのプレゼントとして与えられた救い主のしるしを見て喜びましたから、人々にもその喜びを伝えました。その「しるし」は、神が私たち人間を愛しておられるしるしです。だから、このしるしをしるしとして受け取ることが出来て喜びに満たされた人は、またほかの人にもその喜びを分かち合いたいと願うのです。サンタクロースが現れるのも、プレゼント交換するのも、このことによります。

わたくしは、若い頃会社員となりましたが、所属した職場の先輩たちは、六甲山への登山という催しでの歓迎会を開いてくださいました。昼の弁当はどこかで買えるだろうくらいの軽い気持ちで寮を出ました。ところが、食料統制中の戦時中のこととて、弁当を売っているところなどありません。遂に弁当なしで登山口へ着きました。5月の六甲は緑も美しく、つつじも映えていました。しかし、昼の弁当を持っていない私は、周囲の風景を愛でるどころではありません。いよいよ山の中腹で休憩となり、先輩たちが弁当を開いている中で、私は身の置き所もなくもたもたしていました。その様子を見た先輩の1人が「なーんだ、君弁当もって来なかったのか。だったら丁度良い、家内が、『若い人はいくらでも食べるから、分けて上げて』と言って用意してくれた分があるから、遠慮なく食べたまえ。」と声をかけてくれました。

もう一人の先輩も同様でした。

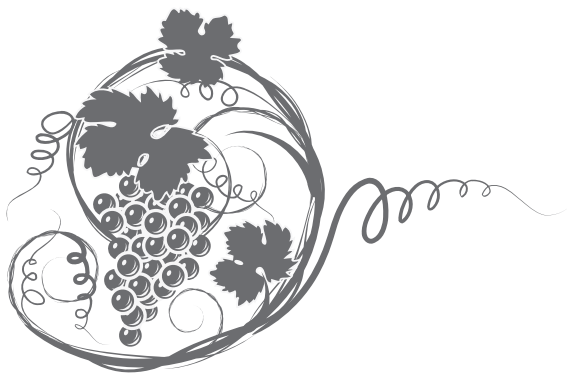
この時、別の寮に在住の同期生が同行していて、彼は寮で作られた弁当を持ってきていたのですが、このお相伴に預かって、冗談まじりに「寮の弁当より美味しい弁当に預かることが出来ると分かっていたなら、なまじ寮の弁当など持ってこなかったほうが良かった」と言ったものでした。

わたくしは、あとになって、このことが、キリストが「貧しいものは幸いである」と言われた理由であるとわかりました。それは、貧しいこと自体が幸いである、ということではありません。幸いなのは、貧しい者に、自分の持ち物を割いてでも、その貧しさを豊かさに変えてやりたいと願い、事実そのように配慮してくれる人がいてのことです。

わたくしたちが、自分の中に暗闇など全くなく、死ぬことについても

何ら恐れることなく、「今の自分で十分満足です」と言っておれるのであれば、キリストは無縁の方です。しかし、薄暗い家畜小屋に置かれた牛や馬の飼料おけのように、絹や羽毛とは似つかわない藁を拠り所とするしかない人間であるなら、そこへこそキリストは来て下さる、というのが、クリスマスという出来事に秘められている喜びのしるしなのです。このことを、聖書が告げているクリスマスの意義内容として受け止めて、年中行事としてではなく、自分に与えられた神からのプレゼントとして喜ぶ、新しい日へと変えられるようにと願ってやみません。

(しのだきよし 日本基督教団愛知老人コミュニティーセンター理事長 2011.12.20  
クリスマス礼拝説教)



## 自分発見のために

出口 博也

こんにちは。企画地域連携室の出口といいます。私が働いているこの大学の建学の精神に関することで、何かお話をしてくださいと、キリスト教センターから頼まれたのですが、なかなか難しいテーマだなと思っております。難しいことを言っても皆さん退屈しちゃうと思いますので、私の学生時代のこととか、仕事をしてきたことの体験で、私なりの言葉で建学の精神を考えたエピソードをお話して、皆さんが何か学びとってもらえたら嬉しいなあと思います。

皆さん！ 就職して働くということ考えたとき、自分が本当にやりたいことを見つけて、そのやりたい仕事ができればそれが一番幸せなことですよ。それは、勿論皆さんにもそう思ってもらえると思うのですが、でも、それって口で言うのは簡単だけど、じゃあ、やりたいことは何なの？ と考えた場合、十代やまた二十歳代になられたばかりの皆さんには、なかなかすぐに答えが出てこないと思うのです。実際、私もそうでした。自分って一体何がやりたいんだろうと思い悩みながら学生時代を過ごしていたように思います。今日は、綺麗なことだけ言っても仕

方ないので、私が働いてみて失敗した失敗談も含めてお話をさせていたきたいと思います。

まず、私の高校時代のことからお話をしていきたいと思うのですが、私は、高校生のとき数学とか理科が結構得意だったものですから、学校の先生から「君は理系に行きなさい」と言われ、理系の大学に行くことに決めました。それが高校2年生の時です。理系には医学部ですとか、薬学部、農学部、あと理工学部とか理学部、そんな学部があるのですが、その中から、将来どんなことがやりたいのかなと考えながら学部を選んでいった訳です。私の場合、理工学部電気工学科という堅苦しい学科ですけど、そんなところに入ってみました。ただ、何か将来やりたいと決まっていた訳ではなくて、僕が大学に入ったのは1980年ということで、日本がうなぎのぼりで調子が良くて、バブル経済真最中の時代で、非常に元気だった頃です。日本の電気会社が特に人気だったのでそんな分野に行けたらいいかなあと、軽い気持ちで理工学部を目指した訳です。その当時、大学に合格するのが最優先で、入ってから何を勉強するのかというところまでは、詳しく調べていませ



んでした。当時は今みたいに大学のオープンキャンパスというのもなく、雑誌や赤本などで大学の情報を調べるくらいのものでした。

ところが、大学に入学してみると正直勉強が楽しくないなあと思って、次第に学校を休みがちになってしまったのです。不登校と言う訳ではないのですが、大学へは行くのですが、大学の近くで友達と遊んでしまう。そんな日々を送りがちになってしまって、なおかつ、自分がこの学部にいるのかなあという迷いがあったものですから、そんなこともあって結局、一年留年し、5年かかって卒業しました。就職については、理系にはありがちだったので研究室推薦というかたちで就職しました。理工学部だとほとんど全員、皆さん技術者として就職していきます。私は、愛知県のある会社で自動倉庫の仕事を2年間ほどやっていました。自動倉庫を会社に納める訳ですけど、納めた自動倉庫が、いろんなトラブルをおこします。そのトラブルを、調査しに行ったりですとか、直したりとか、改造したりとかそんなことをやりました。夜中の11時とか12時とかまでの残業も結構ありました。そこで、機械とかコンピューター相手に日々仕事をしていて、ある時、自分は機械相手ではなく、人を相手にする仕事がしたいと思えてきました。非常に苦しみ悩んだのですが、やっぱり自分のやりたいことは

人間相手の仕事なのではないかと思った訳です。そんな時にこの大学にたまたま転職する機会がありまして、それから16年間名古屋学院大学でお世話になっています

で、ここでのポイントを皆さんにお伝えしたいのですが、本当に苦しい、究極な状態に追い込まれていくと、本当に嫌な仕事は続かないのです。嫌々やっていることは、続かないです。それでは、どうやって自分のやりたいことを見つけられるのかというと、人によって答えは違うと思うのですが、本を読んだり、映画を見たり、旅行に行ったり、いろいろあるとは思いますが、自分の経験から言うと、いろんな人と接して、そこから学ぶということに尽きるのではないかと考えております。人と接して、そこから謙虚な姿勢で学ばせてもらうという姿勢が大切なのではないかと思っています。学生時代を過ごされている皆さんですと、クラブとかサークルとか、アルバイトでもいいのですが、そこである程度打ち込んでみるというのが、皆さんにとっては、いいのではないかなあ、大事なのではないかなあと思います。

いろんな人と接していますと、すごいなあと思える人とか尊敬する人にも会いますし、意見が対立してうまくいかないこととか、いろんな経験をしていくと思いますけど、結局、他人というのは自分にならないものをいろいろ持っています。だから、様々な人と接していると、逆に、自分自身

というものを多方面の角度から照らしてもらえて、自分が見えてくる。そんなことがあると思います。

就職するにあたっては自分を発見する、自分を見つける、本当にしたいことを探すことが大事であると言われます。ですけど、自分発見は決して自分一人では出来ません。人と人とのかわり合いを通じてこそ、本当の自分の姿が見えてくるのだと、私は思っております。

さらに一つだけ、私が人と人とのかわり合いのなかで、特にみなさんに気に留めていただきたいことが

あるとしたら、自分自身の存在は本当に小さなものだ人に支えられているのだという謙虚な姿勢で人とふれ合うということです。そう言った姿勢の中で何かを学び、自分の成長の糧にしていく、そんなことが大事であると思います。神様と人の前で謙虚であることは、本学の建学の精神であります「敬神愛人」につながることもあります。

みなさん。学生時代に多くの人と出会い、謙遜を身に付けながら、将来のことをじっくり考えてほしいと思います。

(でぐちひろや 企画地域連携室室長 2011.4.28 カレッジアワー奨励)

# 新 入 生 の 皆 さ ん へ

## 敬 神 愛 人



(F.C.クライン)

「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」  
イエスは言われた。『心を尽くし、精神を尽くし、思いを  
尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最  
も重要な第一の掟である。

第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分の  
ように愛しなさい。』—」

(新約聖書 マタイによる福音書22章36～39節)

名古屋学院大学に入学された皆さん、ご入学おめでとうございます。  
皆さんは自分で選んだにせよ、大学に選ばれたにせよ、とにかくこの大  
学の学生となられたのです。皆さんはこの大学について何をご存知で  
しょうか。これからいろいろな機会に聞かれたり、読まれたりされるで  
しょうが、ここでも少しお話ししたいと思います。

☆

私立の学校はそれぞれ独自の理念、「建学の精神」を持って建てられ、  
またそれを継承して運営されています。わが名古屋学院大学の「建学の  
精神」は「敬神愛人」です。これは前述の新約聖書から引用されました。

人間は神を愛し敬うこと、そして自分を愛するように隣人を愛するこ  
と、この「敬神」と「愛人」を一番大切な掟として守らなければならないと  
いう、イエス・キリストの教えです。これは、ただ人と仲良くしなさいと  
いうヒューマニズムからだけでなく、神を敬うことによって成立する隣  
人愛です。これを教育の基本にしているのです。

☆

1883年、アメリカからフレデリック・チャールズ・クライン (F. C.  
Klein) という宣教師がキリスト教の伝道と英語学校を目的として来日  
しました。そして横浜に英語学校、教会をつくるなど伝道の成果をあ

げ、彼が次の着任地として夫人とともに名古屋に来たのは1887年でし  
た。彼らは名古屋に着いたその日から英語の学校を開いたのです。現  
在は名古屋市中区栄のちょっと東に位置します。その「私立愛知英語学  
校」は「名古屋英和学校」と改称し、これがわが名古屋学院大学の基とな  
りました。

その時、クライン博士がその教育の基本理念として掲げたのが「敬神  
愛人」でした。

☆

新入生の皆さん、皆さんはこれから少なくとも四年間はこの大学の学生  
として勉強をしていくのです。ここでは勉強ばかりでなく、人間を成長  
させていくことにも励んでください。

そして私たちは祈っています。「敬神愛人」が示すように、皆さんが自  
分を愛するように他人を愛することができますように、また、人間の力  
を過信することなく、それをはるかに超えた存在を認める、謙虚な人間  
へと成長を遂げることができますように。

## ◆ チャペルへの招き ◆

チャペルでは週に二回、それぞれチャペルアワー、カレッジアワーと称  
してキリスト教の礼拝の時間を設けております。チャペルに集い、教職  
員や近郊の牧師の奨励を聴き、賛美歌を歌います。大学は決して、皆さ  
んにキリスト教の信仰を持たせようと考えているわけではありません  
が、世界の大きな文化の源流の一つともいえるキリスト教に少しでも触  
れて、何かを感じていただければと考えております。

<名古屋キャンパス>:チャペルアワー 火曜日12:40～13:10 白鳥学舎チャペル  
カレッジアワー 木曜日12:40～13:10 白鳥学舎チャペル

<瀬戸キャンパス>:チャペルアワー 金曜日13:00～13:30 瀬戸学舎チャペル

☆

チャペルは原則としていつでも開いています。静かに落ち着きたいと  
きはどうぞお気軽に利用してください。ただし、大声でのおしゃべり、  
飲食は禁止です。チャペルの椅子に座り、静かに自分と向き合い、語り  
かけ、そして内なる声に耳を傾けると、新しい導きをそこに見出した  
り、また何か発見があるかもしれません。また、チャペルでは宗教講演会  
やコンサートなどの様々な行事や勉強会などを行っています。